きびのさと
NO114
月刊
昭和四十二年十二月一日発行　非売品
岡山県都窪郡吉備町東町一二五字垣方四二七三
吉備郷土協会
第十一輯　雑集篇　第十一号
第113号つづき

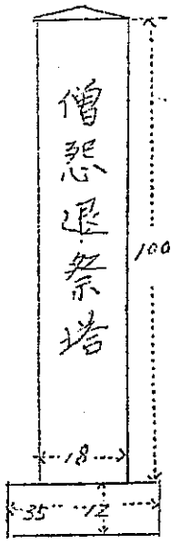
## ○御崎神社（僧怨退祭の由来）その二

拝殿は二間に二間半にして大正十三年五月十五日に狭谷部落の氏子が寄附を集めて改築したものである。拝殿の左に世五輪角の台石の上に高さ四糎、十八糎角の碑がある。正面に「僧怨退祭塔」の文字が刻んである。

この塔について古老の説によると日蓮時代の文政、天保の頃にこの地の正法寺に一口院日深上人という僧がいた。或る年この地方は秋の收穫が手年よりも少なく農民は租税に苦んでいたが、誰れ一人として その窮状を訴えるものはなかった。日深上人は部落民のために代表者をかって出て西花尾村の庄屋太田助内を訪れてその窮状を説き減租のことについて嘆願した。太田助内は寺の住職でありながら行政に口喙をのべたというので問題となり藩の耳に入り僧である所がとやかく云ふ筋合のものではないと日深上人は退けられ、まして即座に正法寺を追放されてしまった。藩の命令であるからどうすることも出来ず その夜日深上人はあわれな姿でどこにか出ていったのである。それから幾日か過ぎて氏子の矢尾熊吉が御崎宮へ参詣した處境内の松樹に長い五寸釘が打込んでありを発見した。熊吉は誰れかの怨い釘とは知りながらそれを抜き取って帰る途中 我家の入口までできた處俄かに釘を握ったまま右手が硬直あがり、それが原因で永い患いで苦しみ明治十一年八月十五日になくなった。この怨い釘は日深上人が正法寺を追去させられたことうらみ部落民の無情を深く呪いてこの御崎宮に呪の釘を打込んだのである。日深上人は追放になってから諸々を轉々とし後ち姫尾町箕島の正住坊に落着き豫て信仰する帝釈天を勧ふり嘉永二年十一月十六日示寂した。正法寺の山門を入った右側に一口院日深上人の墓標がある。この墓は当邑中とあるので部落の人たちがたてたものである。正住寺は箕島千五百八十二番地にある。現在は赤松山正住寺と改められ日蓮宗の一寺である。ここの境内に十数基の住職の墓があるそのなかに一口院日深上人の墓がある。銘に

「嘉永二酉年十一月中流六日（中旬）一口院日深覚位」。とある。正法寺の一口院の墓と同じものである。

其後数十年を経た明治廿年の頃飛石部落では火災や急死などなにかと不吉の異変が絶えなかった。これは何かの因念ではないかと、いい出すものもあって加持祈祷をして貰った處、一口院日深上人の怨恨が原因であることがわかり庚申堂の境内に岩倉大明神を勧請して祭り、また日深上人の怨霊を恐れて部落民相謀って御崎宮境内に右の石塔を建てて毎歳祭祀する習しがある。釘を打ち込んだという松樹はいまは枯死して株のみ淋しく遺っている。




石塔の銘は怨んで退いてゆく僧を祭ると解すべきか。

前記矢尾能吉の子は四人あり次男の六三郎は明治の末期には永く御崎宮の総代を勤めたが大正十一年二月六日七十六歳で死去した。六三郎に卯三郎、重、藤九郎、弋八の四人の子があった。上の卯三郎は里住敬の敬呼であったが、家運はその時代から次第に傾き迫塞してつゐに五畝歩あまりの屋敷を全部手離して他郷に出で、いまは吉井聖太郎の所有地になっている。吾の吉井戸が一つ遺っているだけである。卯三郎と弋八はいまは死亡し藤九郎は邑久郡出明に住し、妹の重は現在西平野に九十才の余生を送っている。藤九郎には男五人の子があり、いづれも大東亜戰爭に従軍したが奇跡的に皆生還した。これは平素藤九郎がこの御崎宮を深く崇信していたのでその加護によるものと感得し今に敬虔の念にもえている。

矢尾系譜

矢尾藤次郎 ― 能吉 明治十一年八月十五日死
　　観寿院詮光信士
　　妻おもえ
　　明治四年三月十七日死
　　照日院智光信女

　　卯三郎 文政七年三月五日生 明治廿一年三月廿六日死 贈甲講義
　　矢尾卯三郎大人命霊
　　里住敬々呼
　　妻喜代 文政十年六月廿日生 死不詳
　　贈四級信徒矢尾京比女命
　　妹尾村田中手八の姉

　　六三郎 弘化四年四月九日生 大正十一年二月六日死七十六才
　　聖光院良順義孚信士
　　妻梅 安政三年五月十二日生 大正十三年十月八日死
　　大福村森若外治の次女

　　卯三郎 明治六年八月廿六日生 昭和廿二年十月四日死 八十五才

　　重 明治十年十二月廿五日生
　　西平野に住す

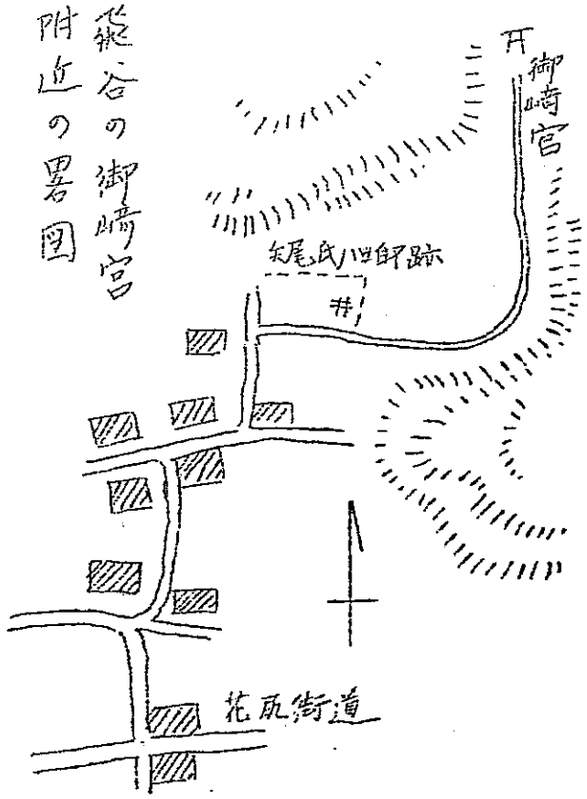
　　藤九郎 明治十五年一月廿一日生 男五人
　　生 邑久郡邑久町出明に住す

　　弋八 明治廿六年生 神戸に死す
　　死年月不詳

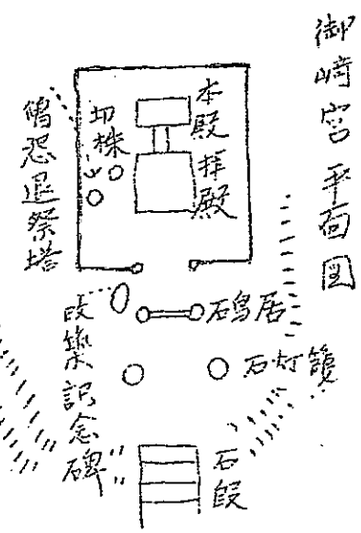
　　遠藤寿徳 禪定門
　　明治十年十二月廿五日生
　　西平野に住す

　　作造 嘉永四年五月六日生 五十一才
　　明治廿六年四月廿四日死

　　音吉 嘉永六年八月十五日生 金家




飛谷の御崎宮附近の略図




△呪詛（じゅそ）ということはいつ時代に始まったものか判然しないが、神仏に祈って怨敵に禍を生ぜしめ甚だしい時は呪い殺すことが叶うと信じられていた。科学の発達した現代ではこのようなことを信ずるものはあるまい。呪をかけるものは女性に限られている

ようである。それは実力がなく抗議が出来ないことから呪うのである。例へば夫が他に女を持って棄てられたとか、無実の罪に苦しむ時に行われるのである。そのいでたちは白装束に黒髪を後ろに乱し白布で鉢巻を締め、それに火を點じた百目ローソクを三本前と左右に挾み、足には草履をうげちゃ黒夜中の丑三ツ時（午前三時頃）を期して呪文を口に唱えながら人目にかからぬよう宮の樹木に五寸釘を打ち込んで帰るのである。時には小さい藁人形を打ちつけるものもある。これは怨む人を形づくったものである。こうして七日間続けるのであるが、満願にならないうちに一度でも人目に遭ふとその願いは叶はず改めて七日間の神かけを修するのである。七日間が無事に終ると前方に大きな黒牛が横たはっている。これを怨れず跨げて帰るのである。しかし果してその目的を達成する上にこうした念願が効果的であるか、どうか現代人では

○

城址は庄村大部の真言宗日差山宝泉寺のある所である。地形は黒住山の山麓が東に延びて足守川流域に突出している丘陵で、眼下に加茂の平地を望み、北は黒住、南に矢部の村落がいらけて眺望がよい。

この城は天正十年織田毛利の両軍の合戦の時、毛利氏に属し守将川田八助久真、その後久勝らが終始数百騎にて立籠り織田勢の攻撃に備えたが、味方の日畑城が攻落せらるる前に破れ川田兄弟は辛うじて城を抜け出て後退した。戦后川田氏は



浦崎（いま高松町）に住し農業に注したという。城は宇喜多氏の有に帰したが別に部将を配置した記録もなく廃城になったらしい。その城址へ後世いまの宝泉寺が日差山の寺坊から移ってきたのである。この川田八助は古川古杉軒の説によると祖父は弾正左エ門といい曽祖父は藏人と号し、代々細川家の功臣にして源平の戦に高松屋島で扇の的を射止めて高名をあらわした那須與市宗高の枝流という。八助は其后戦塵が治まってから備前の藩主池田宮内少輔忠雄に仕え、小田原の出陣や大阪の出陣にも従うて武勇を顕はした。後ちに浪人して河辺村（いま真備町）に定住していた。この時岡田藩主金蘭院殿（伊東丹后守）に随従して河辺川（いまの高梁川）の三ツ子岩の派水溯のほとりを通っていた處（三ツ子は昔宿屋、下道、球口三郡（みつごおり）の堺になっていたので三郡とも書き、後ちに訛って三ツ子となった）流れに瀕んで巨岩が聳え、その下が水勢はげしくうづまいて川底が深く えぐられて渕となっている。そして川の流れが西と東の二股にわかれているので派水溯とも云うのである。（この流れは後世大出水毎に被害が多かったので明治四十四年四月から十五ヶ年の長い歳月を要して川筋を東一流に付替える大改修工事が行われて漸く大正十四年三月に現在の如く一つの川筋になったのである）。御供のものが この渕は水底に大きな洞穴があって鯉魚が多く棲んでいるが水深のために渕丈も容易に潜ることが出来ない、という。川田殿は御沈みなさるか。というと八助はもとより強勇にして水練の達者なものであるから何の会釈もなく、心得たりと懐力を

揺って淵へ飛び込んだ。八助は水底に潜って探ぐってみると、なにか怪しいものが動いている。不思議に思い、よく〳〵見ると大きな虬（みづち）である。証拠がなくては武士の誉れにもならないと思い、刀を抜いて格闘し、その鱗を二枚とって水上に浮んできた。見ている人は八助の武勇に感激したという。この鱗は径六糎もあった。永く河辺の蔵鎌寺という寺の宝物として保存していたが、寛文の末期に寺へ盗賊が入って持ち去ったという。八助は剛直にして膂力衆にすぐれ、武名の高い人であったが気質にして廉直、甚だ性急であったと傳られている。七十餘歳でこの世を去ったが子はなく嗣は絶えた。妹一人あったが小野氏某の妻となったがこの人にも子は生れなかったという。「備中府志」には八助の子に太郎左エ門というがあり河屋城主となり云々とある。太時代に相違あり俄かに信じ難たい。川辺附近にその子孫と稱して河田姓を名乗るものがある。

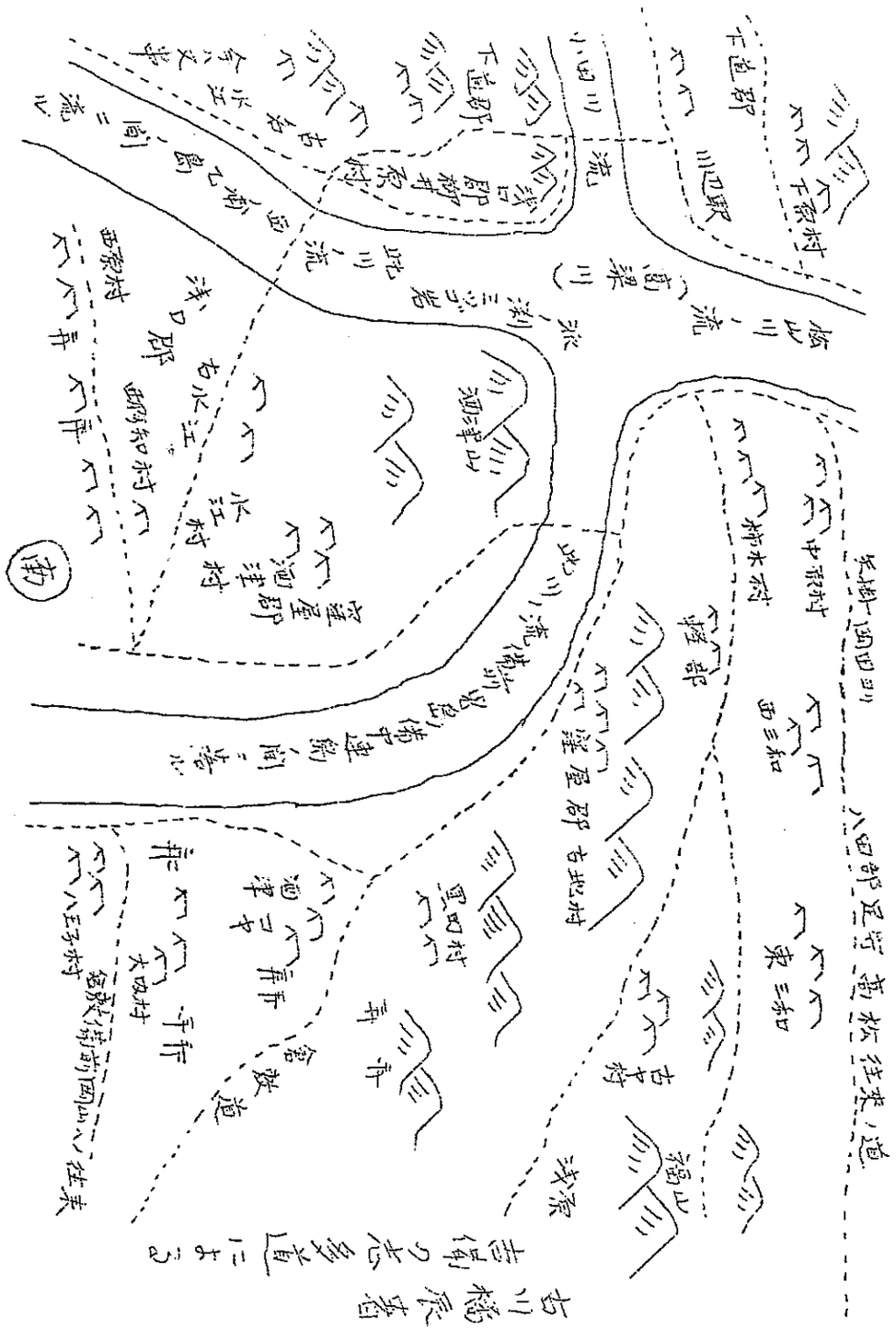
この三つ子の派の渕というは往古から靈異的の地域にして、日本書記の巻第十一大鷦鷯天皇（仁徳）（三一三―三九九）の條にこう載っている。

吉備中の国（備中）の川島河（高梁川）の派（かわまた）に於て大なる虬（みづち）有りて人を苦ましむ、時に路人（みちゆきびと）其の虬に触れて行けば必ず其の毒（あしきいきづき）に被（おかされて）れて以て多く死亡せぬ、是笠臣（かさのおみ）の祖県守（あがたもり）人と為り勇悍（たけ）しくして力強し、派渕に臨みて三の全瓠（おほしひさご）を以て水に投げて曰く、汝毒毒を吐きて路人を苦ましむ、余汝虬を殺さむに、汝是の瓠を沈めば則ち余避らむ不能沈者（えしづめずば）仍りて汝の身を斬らむ、時に水虬鹿に化（な）りて以て瓠を引入る瓠沈まず、即ち剣を挙げて水に入りて虬を斬る、更に虬の変類（ともがら）を求む乃ち諸虬の族渕底の山穴（ほらあな）に満（あふ）めり悉く之を斬る、河水血に変りぬ、故に其水を号けて県守渕（あがたもりのふち）という。とある。

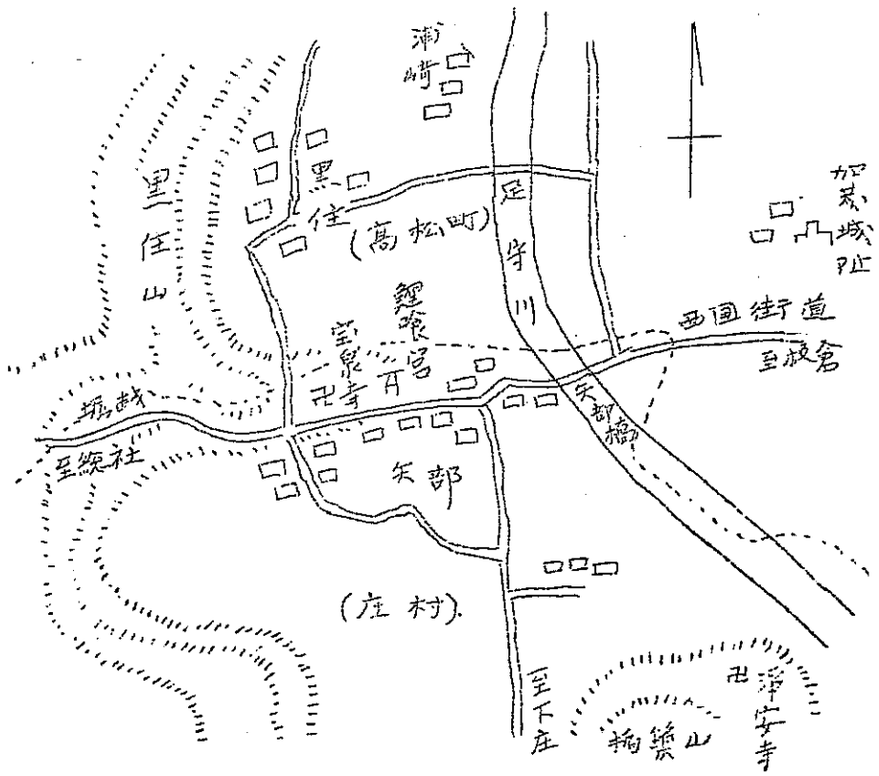
虬（みづち）とは蛟とも書き言海には龍の一種にして（み）とは蛇のこと（つ）はこれなり（ち）は霊異の稱。とあり。蛇に似て四脚のものという。いまの山椒魚のような原始時代の爬虫類ではなかったろうか。形状は蜥蜴を大きくしたようで皮膚は山椒の樹の皮に似ているのでその名がある。鰐は円く扁たく眼は小さく四足の前足は四指にして後足は五指ありおもに溪澤に住み水陸両棲にして大なるものは七八尺にして百年から二百五十年の生を保つという。半身を割いて水に投ずれば終に復た全身になるというので半割（はんざき）の別名がある。

笠臣の祖県守というは仁徳天皇の御父應神天皇が葉田の葺宇宮（いまの足守の八幡宮）に行幸の時、御友別が天皇に御食膳し侍奉したので天皇は大いに悦び給いよって吉備の国を割いて御友別の子孫に與へられた。即ち長子の稲速別を川島県（川島河の名が起る）に封じ、これが下道臣の始祖である。次に中子仲彦王を上道県に封ず（いま備前上道郡の起源）次に彦王を三野県に封ず（後の御野郡でいまの卿津郡の起源）これが三野臣の始祖である。また御友別の弟鴨別を波区芸県（はくぎ）に封ず（いまの

浅口郡鴨方地方とう）これが笠臣の始祖である。



河屋城阯（宝泉寺）附近略図





山陽線 庭瀬駅前
糸竪延花
会社
合名
吉備整経所
電話吉備局一八番
有線一八〇八番

吉備町平野・国道筋
トモエ葬儀社
電話吉備局四四番
有線七一〇番